



現在の小菅修船場跡。海（右下）に向かって横やかに下る斜面と中央にある歯形軌条付レールは当初のままのものと見られる。左右の線路とその上の台車群は、戦時中に改造されたもの。突橋種小園（奥）の中央から見る装置は牽引用チェーンの延長／短縮装置。左右にある電動式巻上機は戦後に設置されたもの。

**発刊の辞**

わが国産業近代化のバイオニアである平野富二の生誕地に記念碑を建立し、明治五十年の記念すべき年に当たる二〇一八（平成三〇）年一月二四日に除幕式をおこない、長崎市に寄贈することができました。

平野富二は、幕末の長崎に生まれました。長崎製鉄所の完成直後に抜擢されて機械技術者として育成され、本木昌造の下で蒸気船の機関手として経験を積みました。その知識と経験を基にして、のちに世界遺産となった小菅修船場の初代所長として活躍し、立神ドックの開閉を建てる自ら工事を推進し、長崎県時代の長崎製鉄所最後の経営責任者として、長崎の繁栄を図りました。

その後、本木昌造に招かれて活版製造事業に身を投じ、東京に進出、活版印刷の全国的な普及に貢献しました。かたわら、わが国最初の私設洋式送船所を東京石川島の地に設立して、造船・機械製造・構造物加工立などの分野で明治前期の産業近代化に貢献しました。二〇一六（平成二八）年のこととなりますが、この年が平野富二生誕一七〇周年に当たることから、これを機会に平野富二の生家である矢次家のあった場所を調査しました。



長崎市によって設置された長崎さるくボード



平野富二ゆかりの地 東京編

**◎長崎新妻出張活版製造所**  
**（平野活版製造所）跡**（地図二八頁参照）  
 所在地 千代田区神田和泉町一  
 （上野駅西口二番地）神田区神保町和泉町（東口側）  
 標高物 なし

明治四二（一八七〇）年七月、平野富二は新妻と社員八名を引き連れて長崎から上京し、文部省御用活版所の一部とそれに隣接する部屋を借り受けて、活版製造のための事業所ならびに住居とした。すなわち平野富二の活版製造事業はここから始まった。

当時は政府の一部機関を除き、一般には活版印刷の効用が未だに認識されていなかったため、活字・活版の販売に苦勞したり、そのため、諸官庁に布告・布達類の活版化を働きかけたり、手印刷機の国産化に着手して活版印刷の普及を図った。一年足らずのあいだ活字の需要が急増したため、平

**◎文部省御用活版所（小幡活版所）跡**  
 所在地 千代田区神田和泉町一  
 （上野駅西口二番地）神田区神保町和泉町（東口側）  
 標高物 なし

明治四二（一八七〇）年一〇月、平野富二が、本木昌造の指示で小幡正蔵を所長として派遣し設立した。当初は大学三（四頁参照）・大東校（二九頁参照）・大学南校（二六頁参照）に活版を納入する目的で設立したが、官制の変更により、文部省御用活版所となった。

しかし明治五二（一八七九）年九月、当地にあった文部省活版所（二九頁参照）が廃止されたため、「小幡活版所」と称して自主営業の道をたどり、明治六二（一八八三）年になって、小幡正蔵は平野富二の了解を得て小幡活版所を閉鎖し、共同経営者だった大坪本左衛門と共に「大坪活版所（一）神田五軒町の海島ビル敷下（五四頁）を設立して独立した。

**おもな内容**——目次より

＊

**記念式典**

- 平野富二 略伝／平野富二 略伝 英文
- 平野富二 年譜

明治産業近代化のバイオニア

- 「平野富二生誕の地」碑 建立 趣意書
- 平野富二生誕の地 確定根拠
- 長崎 ミニ・活版さるく
- 平野富二ゆかりの地 長崎と東京

**長崎 編**

- 出島、旧長崎県庁周辺、西浜町、興善町、桜町
- 周辺、新地、銅座町、思案橋、油屋町周辺、寺町（男
- 風頭山）近辺、諏訪神社・長崎公園、長崎歴史
- 文化博物館周辺、長崎造船所近辺

**東京 編**

- 平野富二の足跡
- 各種教育機関
- 官営の活字版印刷技術の伝承と近代化
- 洋学系／医学系（講義録の印刷）／工部省・
- 太政官・大蔵省系（布告類・紙幣の印刷）
- 平野富二による活字・活版機器製造と印刷事業
- その他、民間の活版関連事業
- 勃興期のメディア
- 「谷中霊園」近辺、平野富二の墓所および関連の地
- 「平野富二生誕の地」建碑関連事項詳細
- 「平野富二生誕の地」碑 建立
- 募金者ならびに支援者・協力者 ご芳名
- あとがき

ちいさな活字

おおきな船

『平野号』出発進行

ようそろ！



船出する

あらたな航海に

いままた『平野号』は

ボンボヤージュ

平野富二は長崎にうまれたひとと伝わってきた。長崎では東京に進出したひとと伝わった。ようやく生家が長崎の町司長屋（現長崎県長崎市桜町九番六号）にうまれたことが古文書の渉猟から判明した。この家は長崎の地役人たる町司で、身分は平民ながら、世襲の家禄をうけ、苗字帯刀をゆるされた矢次家の次男であった。さっそく「平野富二誕生の地」碑建立有志の会が結成され、多くの有志の献身的な協力を得て、二〇一八年十一月生誕地の一面に碑の建立がなった。

幼名矢次富次郎は明治五（一八七二）年に妻帯し、戸籍編成に際して平野富二と改名して長崎外浦町に一家を構えた。中島川右岸、鮑の浦の長崎製鉄所、立神ドック、対岸の小菅修船場などにわずかな足跡をのこして、東京に新天地をもとめ、数えて二六のとき、総勢一〇名で長崎をあとにして東京（現千代田区神田和泉町二）に「長崎新塾出張活版製造所」の看板をかかげた。のちに同社は「東京築地活版製造所」と改組改称、「東洋一の活字鑄造所」として自他ともにゆるす存在となった。

素志である機械製造と造船事業も明治九（一八七六）年から開始した。平野富二は数百トンもある巨大な船舶をつくり、橋梁をつくり、蒸気機関をもちいて海上輸送と陸上輸送の進展に貢献した。そもそも明治の国家も企業社会も、まだうそのようにちいさな時代で、なにもかもが草むらからわきあがる時代でもあった。したがってたれもが無我夢中おもう存分にはたつき、家を建て、名を挙げることでできたというのが、明治初期の愉快さであり、あかるさでもあった。平野富二はこうした時代をおもまま奔放にいき、おおきな成果をあげつつ、ころざしなかにして明治二六（一八九一）年に病にたおれた。それでも在京わずかに二〇年ほどであったが、金属活字製造、印刷機器・資材製造、活字版印刷、重機械製造、造船、橋梁架設、航海、海運、運輸、交通、土木、鉱山開発……と、枚挙にいとまのない事業展開をはかって近代日本の創建に貢献した。

今般「平野富二誕生の地」碑の建立を期して直近二〇年ほどの東京と長崎の交流を本書『平野号』に記録した。あわせて、長崎にもうけられた海軍伝習所、医学伝習所、活字判摺立所、活版伝習所、英語学校などの施設の設備と伝習の成果が、江戸・東京の、どこに・いつ・どのように・たれが伝え移動させたのか、そしてこんにちの状況も記録して、今後の研究の手がかりとした。

「平野富二誕生の地」碑建立有志の会にはさまざまな分野と年齢の会員が、重層的に折りかざるように存在していた。こうした会員はいたずらな個人崇拜や、明治の偉人として平野富二をとらえることなく、等身大の平野富二像を描きだすことに尽力した。すなわち平野富二の精神と功績は、明治の偉人という範疇にとどまらず、印刷術という平面设计から、重機械製造という立体造形物にいたるまで、現在のわれわれの日常にも脈々と受け継がれている。



平野富二〔ひらのとみじ〕  
1846年10月4日〔弘化3年8月14日〕  
—1892〔明治25〕年12月3日

## 平野号

平野富二誕生の地碑建立の記録

B五判

四〇八頁 図版多数

ソフトカバー

定価：本体三五〇〇円＋税

ISBN978-4-947673-95-0 C1020

\* 発行日

二〇一九年五月三〇日初刷

編集 「平野富二誕生の地」碑建立有志の会

発行 平野富二の会

発行所 「平野富二誕生の地」碑建立有志の会事務局

一六〇一〇〇二二

東京都新宿区新宿二一四一九

株式会社 朗文堂 内

電話 〇三―三三三三―五〇七〇

ファクシミリ 〇三―三三三三―五二六〇

info@hirano-tomiji.jp

http://hirano-tomiji.jp

株式会社 朗文堂

www.robundo.com

typocosmique@robundo.com

